

ISから逃れたどり着いた島

難民とる来 1

地中海へ脱出「生まれ変わった」

海を漂っていたのは三日三晩だと思いが、定かでない。ただ、イタリアのランペドゥーサ島に着いた時、8歳だったハシブ・ブハリさん(21)は「生まれ変わった」ような気がしたのを覚えている。

地中海に浮かぶイタリア最南端の島は、透明度の高い海が人気のリゾート地だ。だが、ホテルやレストランに囲まれた華やかな港の片隅では、似つかわしくない光景が連日、目撃されている。

地中海に浮かぶイタリア最南端の島は、透明度の高い海が人気のリゾート地だ。だが、ホテルやレストランに囲まれた華やかな港の片隅では、似つかわしくない光景が連日、目撃されている。

隣家で銃声が…

生まれはパキスタン。幼い時からリビアで国際学校に通い、何不自由なく暮らしていた。父親は金細工で成功し、複数の会社を経営していた。

ある日、学校から帰るため通りになると、大人たちが「お祭りだ」と騒いでいた。「カダフィ大佐が殺された」と、父親が言った。

カダフィ氏は1969年にクーデターを率いて以来、最高指導者として君臨していた。チュニジアで始まった「アラブの春」と呼ばれた民主化運動で内戦になり、2011年に倒れた。

リビアはさらに混乱し、一家の暮らしも暗転した。治安が悪化し、過激派組織「イスラム国」(IS)が街に迫って来た。地下室に隠れていた

一家はリビア脱出を決心した。海辺で1カ月ほど待たされた後の、10月の夜だった。密航業者の手引き

目隠しされ密航

一家はリビア脱出を決心した。海辺で1カ月ほど待たされた後の、10月の夜だった。密航業者の手引き

と、となりの家で銃声が鳴り響いた。「5分ほど計ってはいるが、それくらい長く感じた」。翌朝、父親が見に行き、家族全員が亡くなっているのを確認した。ブハリさんもこっそののぞくと、仲良しだった9歳の男の子の頭がなくなっていた。

ランペドゥーサ島に着いた時、それまでの恐怖がすべて消えた。新しい服や食べ物ももらい、健康診断を受けた。

で、目隠しをされて車に乗せられ、遠浅の浜を歩き、ゴムボートで沖合の船に近づいた。小さな船に201人が乗っていた、というのは後で聞いた。すし詰め状態で、甲板に座ったまま身動き一つできないかった。砂浜を歩いた時に小石が足の指にはさまって痛かったが、イタリアに着くまで取り除くことさえできなかった。救助される前の晩は海が荒れ、夜通し波にのみ込まれそうになっていた。「もう死んだと思っていた」

人口800人の村で

そんな壮絶な経験を、ブハリさんが語ってくれたのは、イタリア南部の山あいの村にあるパール(カフェ)でだった。ブハリさんは家族で、この人口800人の村に暮らしている。

ブハリさんらはイタリアに命を救われたが、いまはブハリさんら若い難民たちが、この村を消滅の危機から救っている。イタリアは24年の出生率が1・18と、同年15だった日本と同じく、少子高齢化が深刻だ。そこで政府が始めたのは、地方で難民らを受け入れる取り組みだった。(浅倉拓也)

！ 迫害や紛争により故郷を追われる人は、この15年で3倍に膨れ、1億2千万人を超えた。うち4千万人以上が、難民として国外に逃れている。

難民は自国にポジティブな貢献をするか？ 国際的な調査会社イプソスの「難民に対する世界の態度」(2025年)によると、この考えに賛同する割合は、29カ国の平均で40%、日本は2番目に低い20%だった。

難民と接する機会がありません。肯定的なイメージはどこから来るのだろうか。一人ひとり

イタリアでは、難民らの受け入れでコミュニティを再生した地域がある。そして日本にも、難民がキャリアを築くのを手助けし、難民のイメージも変えようという若者たちの団体がある。

「課題」を「機会」に変える試みについて全7回で紹介する。



ハシブ・ブハリさん(イタリア・カミーニ)



①上空から見るイタリア・ランペドゥーサ島の中心部
②INGOの船のまわりに救急車や赤十字社の車両が集まる。ランペドゥーサ島では連日、洋上で救助された移民が上陸している
③これも2025年11月、浅倉拓也撮影

ともに暮らし 過疎の村に仕事

とる来 難民つくる末

空き家改修・提供 人が集う場に

北アフリカのリビアから地中海を渡る、「死のルート」と言われる危険な密航で、イタリアの孤

島にしがみついたハシブ・プ・プハリ少年の一家が落ち着いたのは、南部カラブリア州の寂しい山村

だった。

このカミーニでは、村の存亡をかけたプロジェクトが始まっていた。

発起人の一人は、後に

村長となるジュゼッペ・

アルファラノさん(65)

だ。大学進学でこの村を

離れて以来、中部フィレ

ンツェに住んでいた。40

歳手前で村役場にポスト

を得て、同郷の妻と喜ん

で戻ったが、村は空き家

だらけで消滅は時間の問

題と思われた。

中学校はすでになく、

保育園も翌年に閉鎖。2

軒あったバール(カフェ

エ)もなくなつた。「コ

ヒーを飲むために、車

で隣村まで行かないとい

けなかった」

その隣のリアーチェ

も、大して変わらない田舎

カミーニのジュゼッペ・

アルファラノ村長



だったが、間もなく世界から脚光を浴びることになる。2004年に村長になったドメニコ・ルカーノさん(67)が、難民らを積極的に受け入れ、多文化共生の村として、よみがえらせたのだ。少子高齢化と地方の過疎化に悩むイタリア政府は、難民らを受け入れ、教育や職業訓練で自立を支援する地方に、人数に応じた交付金を出している。

「おれたちにも、できるんじゃないかな」。アルファラノさんは、同じ頃に帰郷したロザリオ・ズルソロさん(48)らと話し合った。ズルソロさんが経営していた協同組合が主体になって、11年から受け入れを始めた。村の中心部にたかさんあつた空き家を、地元の大工や左官と難民たちが一緒に改修した。リフォームされた古民家は、難民らが住むだけでなく、コミュニティ活動や宿泊のための施設に変わっていった。

いまでは、国内外から集まるボランティアらも、WiFi完備の古民家に宿泊できる。州内でも無名だったカミーニは、田舎暮らしを満喫できる観光地にもなった。伝統的な陶芸や機織りなどを習い、工芸品を販売する難民には、家庭で抑圧されてきたり、長い逃避行で性暴力にあつたりした女性もいるという。彼女らには、心の傷をいやし、自信を取りもどす場もある。

伝統的な農業や食品づくりも復活し、地元の食を味わえ、村人が集うバールもオープンした。21歳になったプハリさんは大学の通信課程で学びながら、プロジェクトの中心を担う。難民の立場や異文化を理解しつつ、イタリアで教育を受けた人材は、欠かせない存在だ。

村の中心地区には約200人の外国人が暮らし、地区の人口は約500人になった。小学校は学年別でクラス編成できるまでになった。保育所やイタリア語の教室は雇用も生む。近郊から約40人が働きに来ているという。

さん(46)は言う。「はじめる頃は不安はあつたよ。でも、彼らがこの文化になじもうとしていくのを見て、歩み寄ることができた」

16年から村長になったアルファラノさんは「村の人は難民と一緒に作業をし、彼らの経験を聞くこともある。そうやって、心を開くようになっていった」と話す。保守的な村で、異教徒同士の夫婦もできた。もちろん、すべての村人が難民や移民を歓迎しているわけではない。バールの入り口で、あつた地元の男性は「移民たちだけきれいな家をもらって、恵まれすぎた」と、記者に本音をこぼした。それでも、アフリカ系の男性を見かけると「ボンジョルノ」と、ほほえみかけていた。(浅倉拓也)



① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

共同生活 市民とマッチング

国外からも関心 国際NGOに

難民と未来をつくる

③

「時間も詳しくなかった」。彼女がドイツ語を教えていた縁で、わが街で困窮する難民らと知り合った。「ちょうどアパートの部屋をシェアする人を探していたから」

イタリアの過疎地が難民による「村おこし」に挑んでいたところ、ドイツの首都でも、若者らが市民と難民を近づける取り組みを始めていた。

マリ出身の男性と一緒にクラブへ踊りに行った。アフリカの偉人の話を聞いたり。

こんな経験を、もっと多くのドイツ人にも伝えたいか。「とりあえず、やってみるか」。空き部屋がある市民と難民のマッチングを、彼女らと3人で始めた。

「当時はそれほど政治に関心はなく、難民の問

ウェブサイトを開けると、ホスト（家主）志願の市民から次々と登録の申し込みが来た。お互いを知ることが目的なので、家や部屋だけ提供す

るといふ申し出は、ありがたいが断った。



ヨナス・カコシケさん
112025年11月、ドイツ・ベルリン、浅倉拓也撮影



任意団体だったウェルジーの合宿で、何ができるか議論を重ねていた渡部カンコロンゴ清花さん（後列中央）と学生メンバーら＝渡部さん提供

国外からも関心を持たれ、後に「レフュジーズ・ウェルカム・インターナショナル」という国際NGOになった。

日本からも16年、若者たちが視察に来た。大学院生だった渡部カンコロンゴ清花さん（34）たちだ。渡部さんはこの年、

難民と関わる学生団体を立ち上げたばかりだった。その名も「Welcome (ウェルジー)」。ウェルカムとレフュジー

（難民）をかけた。渡部さんは静岡県の大学に通っていた時、ゼミの研究をきっかけに、バングラデシュの少数民族の村で、「国から守られない人たち」と共に暮らすようになった。東大の大学院に進学が決まって東京に行き、初めて日本で暮らす難民と出会った。

日本でも困難な状況が続くなかで、祖国のために何ができるかを考えていたり、新しいビジネスを夢見たりしていた彼らは、輝いて見えた。

渡部さんは、一般家庭に難民が泊まるホームステイを計画していた。

「こんな魅力的な世界の若者たちのことを、もっと日本の多くの人に知ってもらいたい」との思いがあった。

ベルリン視察にも背中を押され、短期のホームステイのコーディネートを実行に移した。ほかに、都内のカフェなどでも、難民と出会い、語り合う場として「ウェルジーサロン」を定期的に開催。古い住宅を借り、難民とスタッフらが共に暮らすシェアハウスも作った。

だが、日本に来た難民の大半には、決定的な問題があった。いずれ難民申請は却下され、退去を迫られる可能性がきわめて高いという現実だ。

状況を打破する一つの手段として、渡部さんらは活動の基準を、就職支援にあてた。

（浅倉拓也）

生き抜いた経験 人材として

4 企業に売り込み 「大きな力に」

難民とる未来をつくる

たちに出会った。

「日本では爆弾で殺されることはないが、生きている感じがしない」。

渡部さんは、ある難民の言葉が、胸に刺さった。

逆境を生き延びたたくましさに加え、会社経営者、医師、ジャーナリストなど、母国でキャリアを積んできた難民たち。

「WELGee（ウェルジー）」創設者の渡部カンコロンゴ清花さんは、

東京に来て、そんな難民

るかもしれない不安の中で過ごす。

ウェルジーが創設された2016年は、難民申請の結果が出た9632

人のうち、認定されたのは28人。0・3%にも満たなかった。

能力を生かした就職ができれば、在留資格が安定し、日本社会にも貢献できる。

そんな「ブレイクスルー」を思い描いていた渡

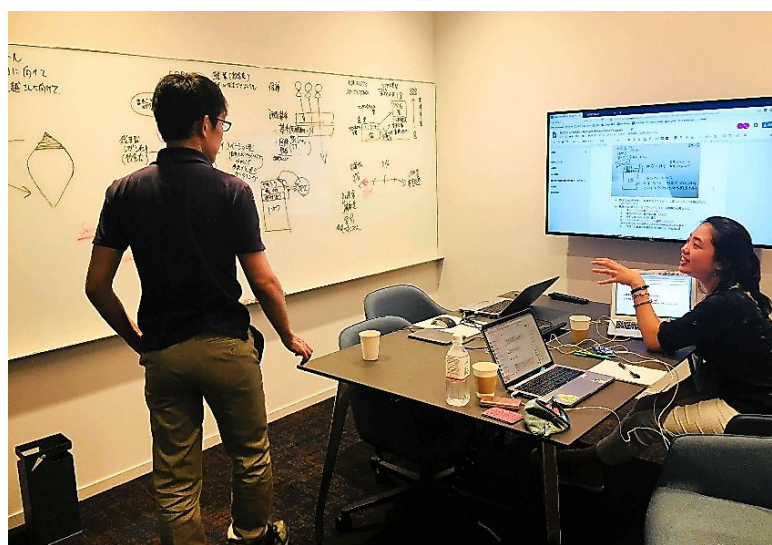
部さんは、頼れる仲間を得た。市民と難民が出会う場として開いた「ウェルジーサロン」に来た山本菜奈さんだ。カナダ留学を終えたばかりの学生で、地方の過疎化の問題に、自治体のインターン

部さんは、頼れる仲間を得た。市民と難民が出会う場として開いた「ウェルジーサロン」に来た山本菜奈さんだ。カナダ留学を終えたばかりの学生で、地方の過疎化の問題に、自治体のインターン

をしながら取り組んでいた。

若い人材を渴望する過疎地と、バイタリティーあふれる難民。双方にメリットがあるはずだ。

だが、そう甘くはなかった。難民の側もそれぞれ個人的な事情を抱えているし、在留資格をはじめ、雇う側に不安があるのも当然だった。「お互



ウェルジーを設立して間もないころ、ビジョンに共感してくれたコンサルタントと勉強を重ねていた渡部カンコロンゴ清花さん(右)＝渡部さん提供

いの『解像度』をもっと上げないとダメだと分かった」。山本さんは、そうふり返る。

そこから2人は、行政書士に協力を請い、在留資格や法律について勉強を始めた。企業もまわった。社会貢献の部署にまわされることも多かったが、こう訴えた。「支援の対象ではなく、御社で活躍できる人材です」

実際に難民に会ってもらうと、企業側が彼らを見る目が変わっていくのも感じた。

渡部さんらが描く夢に共感した、行政書士や人材業などのプロも、ボランティアで続々と集まってきた。

ウェルジーによる就職トレーニングやマッチングで、難民が高度人材として就職した事例は、50件を超えた。昨年、団体を退いた渡部さんの後を継いだ安斎耀太さん(35)は「彼らの経験や能力、そして『難民』という境遇を生き抜いてきた力や情熱は、海外市場に挑む企業などの、大きな力になっている」と話す。

就職の見込みがある難民を主な支援対象とすることには葛藤もあるが、ウェルジーは「難民のイメージを変える」ことをめざす。企業向けウェブサイトで、彼らを「難民人材」と呼んでいる。(浅倉拓也)

この人だからともに働く

とる来 難民つくる未

5

笑顔と真面目さ 職場で輝く

で、仕事をやるときは真剣。そのギャップに魅了された。

男性はカメルーンで少数派の英語圏出身。男性によると、学生運動の間が次々と投獄され、国を逃れることを決意。18

富山県高岡市のリサイクル会社「荒木商会」の荒木信幸社長(50)は、2023年秋にカメルーン出身の難民申請者の男性(33)を社員に採用した。笑顔が人懐っこく、冗

談ばかり言っているよう

出で、食品工場や建設現場などで働いた。ただ、難民の審査については、音沙汰がないまま4年ほどが過ぎた。このままで

はらちがあかないと、NPO「WELge(ウエルジー)」の就職支援プログラムに参加し、出会ったのが荒木さんだった。

荒木さんは「難民」への偏見に、とらわれてはいなかった。それは、知的障害がある男性を社員

に採用した経験と関係しているらしい。特別支援学校を出たばかりだった

その社員が、同僚たちが脱ぎ散らかした靴を人知れずそろえている姿を見ていた。

「障害者でも外国人でも、その人と実際に会ってみないと分からないですよね」

男性は入社してすぐに職場のリーダー的な存在になった。「若い従業員に与えた影響は、本当に



一緒にいると笑顔が絶えない荒木商会の荒木信幸社長(左)とカメルーン人社員=2025年10月17日、富山県高岡市

空気を前向きなものにしてくれる」

だが、最も影響を受けているのは、荒木さん自身かもしれない。リサイクル業で「いつかアフリカへ進出したい」という夢が、現実味を帯びてきた。

調査会社イプソスによる「難民に対する世界の態度」(25年)によると、「難民は自国にポジティブな貢献をするか」と考える人は、日本は29カ国で2番目に低い20%で、22年の33%から毎年下がっている。

一方で、企業などの間では、意識が少しずつ変わっているようにも見え

る、難民採用に関心がある企業は約250社になった。

経済同友会などが関わり、ウエルジーを軸に様々な企業が参加する「難民人材活躍プラットフォーム」も動き出している。

企業関係者が集まったウエルジーのイベントで、オウルズコンサート、オウルズグループ(東京)の矢守亜夕美さんは「攻めの人権」について講演。車いす利用者への配慮が、エレベーターに鏡をつける新たなビジネスを生んだ例に触れ、「難民の課題も、コストではなくビジネスの機会と考えてほしい」と説いた。(浅倉拓也)

高度人材 キャリア生かせず

工場勤務の医師夫妻 制度の壁

とる来 難民の末

⑥

母国での高度な学歴やキャリアを生かせていない難民は多い。

ナジブラ・アジジさん(49)と妻のロキアさん(38)は、アフガニスタンで共に医師だった。2021年に祖国がイスラム主義勢力タリバンに支配され、日本にいた親戚や支援者の助けで来日した。



① ナジブラ・アジジさん(左)と妻のロキアさん、長男のサヘルさん。2月19日、埼玉県三郷市、浅倉拓也撮影
② アフガニスタンで医師として活躍していた当時のアジジさん。本人提供



ナジブラさんはテレビにも出演する著名な医師だった。タリバンに狙われていたといい、日本でも難民認定もされた。

埼玉県三郷市の団地で息子2人と共に落ち着き、始まったのは工場で働きづめの毎日だ。ロキアさんはアパレル大手の工場で、服から飛び出た糸を切るなどの作業をしている。

ナジブラさんは、主に食品関係の工場で働いてきた。医師としては循環器系が専門だったが、現在は野菜の加工場で、水浸しになりながら、機械でネギを刻み続ける。

弁当工場で一緒だった、元大学教授のアフガン難民は、米国の大学で働いていたので、米国に受け入れられた。

カナダなど他国に行った医師には、現地の制度で、言葉を勉強しながら医療現場でトレーニング

を受けると、医療に携わり続けている人もいるという。

日本の医師国家試験をめざしたいが、生活支援などはなく、食べていくのに精いっぱい、勉強をする時間はない。

夫婦は様々な言語ができるため、医療の仕事に就ければ、言葉や文化の違いで病院へ行くのをためらう在日外国人や、対応に困る医師らの役に立てる、と考えている。

「私たちも日本社会の役に立ちたい」。そのため、夫婦が願うのは、ただ一つ。2年間ほど、日本語学校で集中的に勉強することだ。

難民認定が厳しいことで知られる日本だが、数は多くはないものの、



シリア出身の山田禅さん

「留学」というかたちでの受け入れも近年は広がっている。

もともと優秀な若者を選抜していることもあるが、母国でのキャリアを生かしつつ、大学や大学院を終えた後は、安定した就職に成功しているケースが多いようだ。

現在はNPO「WELgee(ウェルジー)」職員で、難民を助ける側になった山田禅さん(40)もその一人。シリアから周辺国に避難している若

者を対象とした国際協力機構(JICA)のプロ

グラムで、17年に留學生として来日した。

「奨学金をもらい、日本の人に優しくしてもらった。今度は私が日本のために働きたい」。いまは日本国籍も取得し、名前も日本ふうに変えた。

2人の息子の父親として、地域貢献もしている。シリアやレバノンでは中東を代表する建設会社で働いていた。それでも、日本で設計会社に採用されるまで、面接を受けた会社は80社を超えたという。「難民になっ

て、日本に来て就職し、働くという人生は、本当にたいへん」。その困難を身をもって知るからこそ、彼らが挫折しないよう、支え続けたいという。

(浅倉拓也)

関心と交流 不安を和らげる

知る機会の少なさを 偏見の要因

とる来 難民つくる末

7

者が上陸するイタリア・ランペドゥーサ島を訪れ、記者はそのことを考えさせられた。

透き通った青い海と白いヨットがまばゆいハーバーと、沈みかけの小舟でぼろぼろになって島に
来る難民たち。決して交
わることはない、分断さ
れた世界を象徴している
ようだった。

しかし、島の人たちに話を聞くと、住民たちの多くはもともと海を渡って来る人々に寛容で、出会えば水や食料を分けていたという。

住民のテレサ・ジャルデーナさん(88)は、自宅に突然、数人の若い黒人男性が現れた時のことを話してくれた。「私はまったく怖くなかった。

彼らの目を見れば、ただ空腹で不安なだけだと分かったから」

とりあえず焼き菓子のビスコッティを渡すと、彼らは小さく割り、分けて合せて食べていた。そこで、スパゲッティを何キロもゆでて、もてなした。次の日も、さらに多くの難民を自宅に招いた。この時は、あまりに多



①テレサ・ジャルデーナさん
②歴史資料館のゲストブックには、難民らと地元の人交流していた時代の写真も残されている。いずれも2025年11月、イタリア・ランペドゥーサ島

くの密航船が島に着いたため、収容所が対応できず、疲れ果てた難民たちが市中にあふれていた。ジャルデーナさんだけでなく、島の住民の多くが、食べ物や衣服を教会に持ち寄るなど、できる

ことをしていたという。島で小さな歴史資料館を運営するファビオ・ジヨバンネッティさん(72)が、来訪者がメッセージを残すゲストブックを見せてくれた。アフリカ系の人たちと島民が一緒に

笑顔で写った写真もあった。元高校の体育教師だというジヨバンネッティさんは「私の生徒もここで移民と話したり、イタリア語を教えたりしていた。彼らに関心を持って、ジャーナリストになった生徒もいた」と話した。

だが、もともと人目につかない場所にあった収容所は、コロナ禍で警備が厳重になって外出できなくなり、いまは住民と難民らの接点が、完全になくなった。「住民に彼らとの交流があった時代、恐れや不安はなかった。だが、接

点がなくなったいま、住民の多くは移民たちを、災いか、ただのモノとして見ている」と、ジヨバンネッティさんは言う。

日本では、どうだろう。難民と日常的に接し、彼らを知る機会が少ないため、偏見や誤解が広がりやすくなっていないだろうか。

情報や技術の発達により狭くなった世界で、人の移動は止められない。難民や移民の受け入れについて、現実的で建設的な議論が進むよう、彼らの姿を伝えていきたい。 〓おわり (浅倉拓也)